No. 1839

足拍子川風穴沢 メインリッジ

79年12月14日～16日

（編成）L田中隆、井出宗通

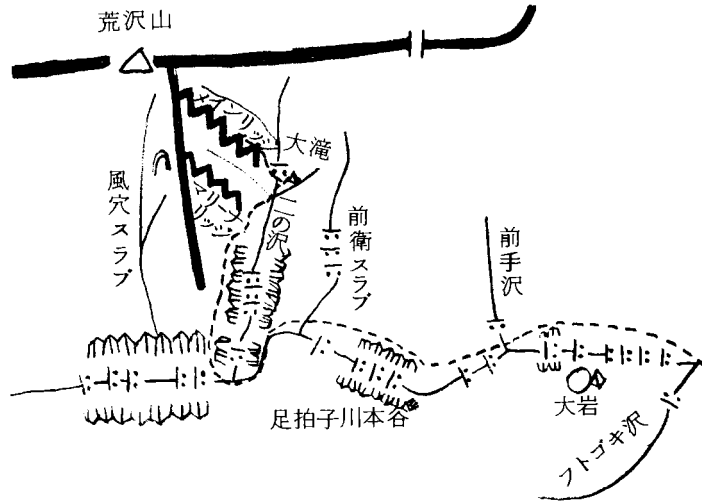
12月14日

（行動内容）出発前日に計画を立て、冬期メインリッジを登るべく出発した。出合まで、予想に反して、苦しいラッセルをさせられた。沢は暖冬のせいか、氷結しておらず、主に左岸のブッシュ帯の、ラッセルに終始した。F1も氷結しておらず左のカンテより越え、そのまま右岸の急な草付壁をトラバースし、F2、F3、F4をやり過す。前面には圧倒的な大滝（七十㍍）が立ちふさがっている。左俣が落ち合う手前より、懸垂下降で沢に降りる。すでに暗くなってきたので、大滝右壁下にてビバーク。

（タイム）越後中里4・00二の沢出合12・00大滝下17・00

12月15日（雪）

（行動内容）天気は悪く、雪がちらついている。大滝も氷結していないので、下段は左俣をしばらくラッセルし、右に行き中段テラスに出る。上段は左壁に取り付き、きわどいバランスで十五㍍直上の後、小かん木にぶら下り、ビレーし、さらに左手の垂直のブッシュ壁と腕力で三十㍍登ると落口左のテラスに出た。メインリッジは、ここから始まっている。ゆるい尾根と胸までのラッセルに苦しみながらコンテニアスで行くと、途中で五㍍のカンテが現われ、左は左俣に向かって切れ落ちている。これから先は、岩稜帯となっているのでスタッカットで行く。次のピッチは岩峰を左に回りこみ、リッジ上に出てビレー。リッジはナイフリッジとなっている。さらにザイルを延ばすと、急に切れ落ちている。ガスの切れ間から、メインリッジの核心部がこつ然と見え隠れしている。すでに二時半を過ぎていたので、今日中に稜線に出るのは、不可能と判断し、下降に移った。懸垂下降四ピッチで前日のビバーク地に降り立ち、暗い中ヘッドランプの光を頼りに下へ下へと下降する。暗い中の沢の下降は危険なので、九時大岩の下で、二回目のビバークとなった。



（タイム）大滝下8・30キレット14・30大岩21・00

12月16日（快晴）

（行動内容）二時間もラッセルをすると、見覚えのあるフトゴキ沢出合に出た。

（タイム）大岩10・00越後中里15・00

（田中隆記）

（在京本部の記録）

この山行は、二日間の予定であったが、十六日の午後になっても下山の連絡がないので、救援体制の準備をはじめた。十五時には、小俣以下五名を夜行で現地へ向かわせることを決めた。そこへ十六時半ごろ、現地から下山の電話があり、食糧等を買う寸前で、間にあった。その後、井出君の家族からの問合せで一騒動した。

No. 1842

足拍子岳南尾根

80年1月19日～20日

（編成）L宮本雅江、飯沼武近、矢島俊一、井出宗通

1月19日（曇）

（行動内容）二月の戸隠岳の訓練を兼ね、足拍子岳～カドナミ岳間を歩こうと四人で出発。上越特有の湿った雪が、土樽駅を囲み、駅前からのラッセルを余儀